2022 年度小委員会活動成果報告

（2023 年　2 月　8 日作成）

小委員会名	環境心理小委員会	**主 査 名**：高橋正樹 **就任年月**：2019 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	環境工学委員会 （環境心理生理運営委員会）	**委員長名**：秋元孝之 **主 査 名**：宗方　淳
設　置　期　間	2019 年　4 月　　～　　2023 年　3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	・人間・環境系を総合的に扱う環境心理研究を発展させるための組織的取り組みを行う。 ・具体的には、前身の小委員会で開催されてきた「環境心理チュートリアル」を継続的に開催すると共に、現在までの研究状況を整理し、今後取り組むべき課題および研究発展のための方策を検討して、実施する。 初年度～4 年度 １）環境心理研究に資する情報の提供（チュートリアル開催等） ２）交流活動の推進(公開研究会、見学会等) ３）研究状況の整理（若手研究者の研究紹介等） ４）活動体制の検討（環境心理研究発展の方向性の検討等）	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：無 主査：高橋 正樹（文化学園大学） 幹事：小﨑 美希（東京大学） 委員：槙　究（実践女子大学）、小島 隆矢（早稲田大学）、上野 佳奈子（明治大学）、大石 洋之（東北工業大学）、古賀 誉章（宇都宮大学）、佐野 奈緒子（東京電機大学）、辻村 壮平（茨城大学）、長澤 夏子（お茶の水女子大学）、西原 直枝（聖心女子大学）、川井 敬二（熊本大学）、大井 尚行（九州大学）、高橋 浩伸（熊本県立大学）	
設置 WG （WG 名：目的）	**チュートリアル運営 WG**： ・環境心理生理分野の研究発展のための一助として、様々な研究技法や分析手法の普及と研究レベルの向上を担い「環境心理チュートリアル」を継続的に開催する。 **環境心理教育検討 WG**： ・環境心理研究の初学者の理解・習得の過程、環境心理教育事例を検討し、課題の整理と新しい研究実践に対応した教育方法の基礎を構築する。 ・社会への還元をめざし、小・中・高等学校から大学、設計者などに有用な環境心理学的知見や教育方法を検討する。	
2022 年度予算	166,000 円	**ホームページ公開の有無**：無 **委員会 HP アドレス**：

項　　目	自己評価
委員会開催数	2 回（年度内計画を含む） （チュートリアル運営 WG：２回（年度内計画を含む）、環境心理教育検討 WG：１回（年度内計画を含む））
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	
講習会	
催し物 （シンポジウム・セミナー等） *能力開発支援事業委員会承認企画	１．第 22 回 環境心理生理チュートリアル「生理量・行動データの測定の作法と技法」（資料名）同上　　参加者数　89 名

大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	充分な成果が得られている。 １．環境心理研究に資する情報の提供（チュートリアル開催等） 　例年通り、年一回の開催を今年度もオンラインにて実施した（2022 年 9 月 26 日（月）：第 22 回環境心理生理チュートリアル「生理量・行動データの計測の作法と技法」）。今年度は、生理量データや行動データへのアプローチをテーマとし、計測技術やデータ解析手法などについて紹介した。生理量データや行動データから有益な知見を取得できるように、データ計測のための注意点や計測されたデータの読み解き方、データから考察への繋がりなど、具体的な研究事例を通して解説する紹介した。生理量・行動データの取り扱いに関しては、いわゆる教科書的に書かれたこと以外のノウハウが多いことから、この分野・手法に興味を持つ研究者にとって有意義なテーマであった。 ２．交流活動の推進(公開研究会等) 　チュートリアル WG において実施したオンライン公開チュートリアルでは、89 名の参加者があり、会員外からも多くの参加があった。3 名の講師による講演後の質疑応答では、参加者を交えた形式で非常に活発な議論が行われ、研究者同士の交流が推進された。 ３．研究状況の整理（若手研究者の研究紹介等） 　今年度は、「若手研究者サロン」と称し建築環境分野における心理的な研究で活躍されている若手の研究者等を迎え、環境心理的な観点から、環境と人間との関係における問題点と今後の課題について議論を行った。 ４．活動体制の検討（環境心理研究発展の方向性の検討等） 　環境心理教育検討 WG において、環境心理学の知識等の教育分野を中心とした社会全般への還元方法及び実践方法について、意見交換した。 　また、昨年度に引き続き、チュートリアルWGにおいて、オンラインによるビデオ会議方式の研究会を行った（委員、講師等の関係者のみ建築会館会議室にいて講演。Zoom による配信）。その結果、遠方からの参加者の増加により地域間情報格差を解消しつつ、さらにオンラインと対面のハイブリッドによる運営方式等に関するノウハウを蓄積し、広く環境心理研究の発展に寄与し社会に貢献した。
委員会活動の問題点・課題	無

＊　小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。

＊　中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学委員会用　自己評価欄

2022 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価・最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	「目標の達成度」においても記述したが、下記の活動を実施し、充分な成果が得られたため、総合評価は A と判断した。 １．第 22 回環境心理生理チュートリアル「生理量・行動データの計測の作法と技法」の開催 ２．上記のチュートリアルで実施した参加者へのアンケート調査では、概ね好評であったとの評価結果を得た。 ３．環境心理教育検討 WG、環境心理生理チュートリアル WG 及び環境心理小委員会の合同で「若手研究者サロン」と称した交流会を行った。この交流会では、若手研究者だけでなく中堅の研究者が集まり、広く環境心理研究全般に関する課題や問題について議論を行った。その結果、研究者や設計者などに有用な環境心理学的知見や教育方法について多種多様な知見を得ることができた。

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画･目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
  - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
  - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
  - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
  - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価･外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。